九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

海老井英次著『日本女性にまつわるHistoria：「男尊女卑」の弊風の中で、女性達は如何に戦い、生きたか』

https://doi.org/10.15017/4377922

出版情報：九大日文. 37, pp.91-94, 2021-03-31. Association of Japanese Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

◎紹介

海老井英次著

『日本女性にまつわるHistoria――「男尊女卑」の弊風の中で、女性達は如何に戦い、生きたか――』

浩瀚な本である。B5判の大きさで614頁に及ぶ大著である。日本における「男尊女卑」の形成過程を確認するため、古代から近代に及ぶ「女性に係わる言説を集め、出来るだけ原文のままに紹介」した結果のボリュームである。本書の目的は副題に明らかであるが、そのモチーフは、「男尊女卑」が歴史化された過去の遺物などではなく、我々が生きている現在の「この社会の中に未だに生きさらばえている幽霊のような「男尊女卑」の幻影を、社会的事実として確認」する意志に根差している。

著者の言う「幽霊」は、東京オリンピックを控えた現在、まさに今の日本の問題となっている。タイムリーな出版であるが、同じような「幽霊」は、「わきまえない女」という感覚が生き続ける以上、くりかえし現れるだろう。「幽霊」のゴーストバスターズになるためにも、そうした「幽霊」を生産し続ける歴史の根深い土壌を探索し確認する必要がある。本書は、その探索の報告であり、それを踏まえた提言でもある。その探索がいかに多岐にわたり、その報告がいかに多くの論点を含むかは、目次の紹介で一目瞭然であろう。

はじめに

Ⅰ「男尊女卑」はどのように形成されたか

第一章　神話と伝承から歴史の中へ

一　『古事記』、『日本書紀』の女神と皇后

1伊邪那美命　2天宇受売命　3弟橘妃と美夜受比売

4神宮皇后

二　女軍と巫女

1女軍（吾田媛、上毛野形名妻）　2巫女と尼（様々な巫女、最初の得度者、善信尼）

三　『律令』の制定と男女の在り方

1「男女の法」と『養老律令』　2孝謙（称徳）天皇と道鏡法王

四　平安朝の「女人成仏」と女流文学

1慶滋保胤『日本往生極楽記』　2紫式部『源氏物語』、「紫式部日記」

第二章　「男勝り」のイメージの原型としての婦女達

1袈裟御前（貞婦）　2巴御前と板額御前（女武者）　3北条政子（尼将軍）と静御前（白拍子名妓）　4日野富子（御台）

5寿桂尼（女大名）と、お田鶴の方（女城主）

第三章　武家の興隆と婦女達
一　「女訓」の新展開と「尼」の変容
1阿仏尼「乳母のふみ（庭のをしへ）」　2存覚上人『女人往生聞書』　3恵信尼と慧春尼　4一条兼良「身のかたみ」5『血盆経』　6「女今川」
二　戦国武将と婦女達――『常山紀談』の婦女達
1山内一豊の妻（巻之四）　2妓女国（巻之一一）　3細川忠興の北の方（巻之一四）　4奥平家の士の妻（巻之二三）
5尼崎幸右衛門が女（巻之二五）
第四章　江戸幕藩体制下の婦女達
一　「婦道」の確立
1「徳川百箇条」　2山鹿素行『武教小学』　3貝原益軒『和俗童子訓』、『女大学』
二　北村季吟『仮名列女伝』　鄒孟軻母、京師節女、周幽褒姒
三　『明良洪範』の「婦人達」
（一）武家の婦女たち　1真田伊豆守信之の夫人　2毛利豊前守勝永が妻　3勝女
（二）老女と姫君　1春日局（御局様）　2千代姫君
（三）庶民の女達（付、「嫉妬」論）
四　『古今烈女伝』の〈男勝り〉の婦女達
1堀直太郎直堯内室之事　2土井大炊頭利重家来佐々木武太夫娘之事
第五章　幕末から維新への展開の中で
一　会津戦争と婦女達
1照姫と娘子隊（中野小竹、神保雪子）　2山川艶　3新島八重
二　幕末期の新しい〈女傑〉達
1高場乱（人参畑の女傑）　2若江薫子（建白女）
第六章　明治維新以降の「婦道」
一　国是としての「婦道」
1明治天皇妃美子皇后　2『明治孝節録』（ます女、そよ女、盲女しか、えい女）　3『幼学綱要』（橘逸勢女、雄略天皇皇后、原駅旅舎婢、安）　4『婦女鑑』（美濃部伊織ノ妻、稲生恒軒ノ妻波留子）
二　「西洋列女伝」の翻訳
1白勢和一郎編・訳『泰西列女伝』　2エリザベス・スターリング作、宮崎嘉国訳『婦女必読　西洋列女伝』
三　「新釈仏典」と「明治武士道・婦道」における「婦女」論
1佐藤良太郎訳『通俗仏説玉耶女経全』　2井上哲次郎『武士道』の「女子」論　3下田歌子『にハのをしへ』と『婦女家庭訓』
四　新スタイルの『婦女鑑』
1上野理一編纂『皇朝女子立志編』（紫式部、師岡綱治妻、山本安兵衛の妻、農婦仙女、勝原銀女、農夫鐘尾広助の三姉妹）　2渋江保著『泰西婦女亀鑑』（勇婦ジャン・ダーク）　3『少女鑑』（瓜生岩子、フローレンス・ナイチンゲール）
Ⅱ「男女同権」をめざして
第七章　明治維新後の「婦女」論

一　開化期の「婦女」論
1村田文夫『西洋聞見録』　2島次三郎『開化女今川』
3森有礼「妻妾論」　4土居光華『近世女大学』、『文明論女大学』
二　開明期の「婦人論」
1那普平斯原著、堀誠太郎訳『婦女性理一代鑑』　2明治女学校開校と「女学雑誌」の発行　3福沢諭吉の「婦人論」
三　維新の婦女の明と暗
1富岡製糸場の女工、和田英『富岡日記』　2「明治の毒婦」――新聞報道と仮名垣魯文『高橋於伝夜刃譚』
四　イザベラ・バードの来日、『日本奥地紀行』の発表
第八章　「女権」と「民法」
一　「自由・民権」と「欧米女権」
1植木枝盛『民権自由論』と『東洋之婦女』　2湯目補隆『欧米女権』　3中山整爾『社会改良　女子教育新論』、『日本将来之婦女』　4ラトクリフ夫人原著、片岡信訳『西洋女大学』
二　自由民権運動と演説の時代
1板垣退助『演説集』と杉山藤次郎『女権美談　文明之花』　2岸田俊子（中島湘烟）と景山（福田）英子
三　「民法典」から『明治民法』への推移の中の「婦権」
1民法典論争（ボアソナードと穂積八束）　2『明治民法』における「妻・女」　3黒岩涙香『弊風一斑　蓄妾の実例』

第九章　西洋との交流と新しい婦女像
一　キリスト教伝来と「聖母マリア」の来臨
1フランシスコ・ザビエルと「聖母マリア」の伝来　2聖教史に誌された日本婦女達　3「原罪」の「エバ」と「聖母マリア」による「救い」
二　西洋的な眼に曝された日本婦人
1新渡戸稲造『武士道』の「婦人」論　2鹿鳴館を彩った三婦人（井上武子、大山捨松、陸奥亮子）　3ピエール・ロチ『お菊さん』、「江戸の舞踏会」　4小泉八雲「勇子」、「おばあさんの話」　5アリス・ベーコン『明治日本の女たち』
三　帰国留学生の活躍と女子大学校の創設
1津田梅子　2成瀬仁蔵と広岡浅子
第十章　職業婦人と「新しい女」
一　職業婦人の増加
1落合浪雄『女子職業案内』　2近藤正一『女子職業案内』　3伊賀歌吉『婦人職業論』
二　「新しい女」の登場
1坪内逍遥『所謂新しい女』の出版　2与謝野晶子　3『青鞜』派の活躍――平塚明子と伊藤野枝　4「新しい女」のスキャンダル化（吉野鉄拳禅『現代女の解剖』）
三　「新真婦人」と「新しい真の女」の新展開
1新真婦人会の設立と西川文子　2吉田熊次『女子研究』の出版　3「母性保護」論争　4「女優」という「新し

い女」――松井須磨子の活躍と島村抱月「婦人問題」論
5「婦人参政権」問題
その後の展開、関連年表（一九一七～一九五〇）
あとがき／参考文献目録／人名索引

参考文献は、多くの関係資料が紹介されている。人名索引も、25頁に及び、約1600名ほどが上がっている。

本書は参考文献や人名索引とも相まって、「日本女性にまつわるヒストリア」事典の性格を備えている。もちろん、日本女性にまつわる長い長いヒストリア（神話・歴史・物語）として読むこともできる。

ヒストリアを語る著者の筆法は、資料（引用本文）を以て語らせることが基本である。つまり、読者が自分の目で、引用された本文を読むことが期待されている。著者は、そのサポート役に徹したかのように、要所には自身の見解や解釈も加えられるものの、基本的には、資料を紹介する文脈の提示、書誌情報をはじめとした資料の背景、言及される人物についての伝記情報や略伝風の紹介、資料についての追加情報などが中心の記述になっている。右のうち、文脈の提示とは、たとえば第一章第二節「女軍と巫女」を例にすれば、折口信夫による「女軍」の説明を紹介した後、吾田媛や上毛野形名妻についての「日本書紀」の本文および現代語訳を紹介するような場合である。また追加情報というのは、たとえば第二章第一節「袈裟御前」を例にすれば、『源平盛衰記』の具体的な本文引用に加え、近代における芥川の「袈裟と盛遠」や「袈裟と盛遠の情交」といった文章の意義や背景、さらに「袈裟御前」の類話として本書第四章の北村季吟編『仮名列女伝』があることの紹介などである。

著者は「男尊女卑」を「幽霊」に見立て、死者であるはずの「幽霊」が今でも生きていることを述べるが、本書を読めば、青鞜を率いた平塚明子も「新しい女は日々に色々な幽霊と、戦つてゐる」と、戦いの相手を「幽霊」に比していたことを教えてくれる。右の引用文の直前にあるのは、「「今日」が空虚であるとき、そこに「昨日」が侵入してくる。」という一文である。「昨日」の侵入を許すことは、「今日」を空虚にすることになるのである。「一時は出版を断念した」（あとがき）著者が、本書の刊行をあきらめなかったのも、「今日」を空虚にする「昨日」の侵入としての「幽霊」の根絶への強い思いを燃やし続けたからであろう。いや、その前に、そのような思いがなければ、そもそも本書の執筆作業そのものが支えられなかったであろう。浩瀚な本書を貫くのは、「あとがき」に記された次の祈願だったに違いない。

女性の何が男性に劣る、というのであろうか。何かあるならば、それを徹底的に究めて、その虚妄性を明らかにしなければならないであろう。そして、社会的に否定し尽くさなければならないであろう。

（二〇二〇年七月　花書院　六一四頁　五六〇〇円＋税）